

福生市の民俗 —— ムラのくらし ——

序 説

福生市といえば、横田基地のある街とか東京からすこし離れた新しいベッドタウンとのイメージが強いが、それでも街のくらしは畑作農村以来の伝統的生活文化が今日にも色濃く伝承されてきている。ことに、人々のくらしのなかにあつて、新しい移住者を多くむかえながらも、ニワバのつきあいやら稲荷講やらといったように新しい近隣関係の成立のなかにも伝統的くらしぶりが色濃く投影されている。また、注目されるのは近年に一生のすみかを求めて福生に住みはじめた人々が、伝統的な生活文化のありように目をむけ、地域への関心を高め、新しいくらしのあり方を模索している点がみられることである。こうした状況のなかで、本報告書は福生市内の南・内出地区に焦点をあてながら、今日まで伝承されてきている人々のくらしぶりを伝統的な経済生活・社会生活中心に明らかにしたものである。

詳細な報告は各篇にゆずるとして、南・内出地区の経済・社会生活の概要と特色について簡単に紹介しておこう。くらしのなかで、もっとも大きな変化のあつたのは、生活のたて方とそれともなう衣食住のありようであることはいうまでもないであろう。南・内出地区でも、他の市内の地区と同じように畑作と養蚕を軸とする生活が戦前まで中心であつた。しかし、経営面積は地主制ともあいまってそれほど大きくはなかつた。こうした畑作中心の生活のたてかたのなかで、食生活をみると、主食は米麦3：7の比率の麦飯が一般的で、米も外地米が半分を占めるといったものであつた。モチなども、タゴメ（田米）のものでなく陸稲が主で、このためタゴメへの憧れは強かつた。稗・粟・黍の伝承はあまりないが、多摩地方の畑作農村の食生活の一典型をよく表わしているといつてよいであろう。

衣生活なども、東京に近い割りには伝統的な風が遅くまで残つていたとみなされるが、注目されるのは晴着である。祝儀・不祝儀に際しての晴着のあり方は、家の経済力によって左右されるが、一般にごく質素なもので、ことに不祝儀においてハオリのヒモだけを変える位とした伝承の多いのは、戦前までの経済力のあり方をよく示しているといえる。住居のありようについても同じことがいえる。

次に、社会生活にふれてみたいが、何といつても注目されるのはニワバである。すでに、「福生市文化財総合調査報告・12」でニワバが所有する膳椀倉との関連で、ニワバの実態を紹介してあるが、本報告書では構造の面に重点を置いた。ニワバと称される社会組織は神奈川県・東

京都に主としてみられるもので、一般に地縁近隣集団と考えられるが、系譜関係を中心とする集団である場合もある。南・内出地区のニワバは、結論的にいうと地縁近隣集団であるが歴史的に考えるといくつかの問題がある。第一には、江戸時代における村との関係である。村の範囲全体をニワバという例があるかと思えば、いくつかのニワバから成っている場合もあるからである。ことに、この地域は支配の上において複数の給人支配を受けているため、村とニワバとの関係をより明確にしていかなければ、村政とニワバの機能の関係も十分に明確にならないからである。これと同じことが、近年の町内会（自治会）制との間にもいえる。第二に、ニワバの機能についてである。ニワバは、近隣集団として祝儀・不祝儀的のつきあいはいうに及ばず、互助としての膳椀倉を共有し、かつ稲荷講の構成単位ともなっている。この共有財産としての膳椀倉の成立は、明確につかみえないがおそらく近世末ではないかと推測されるが、この倉に保管されている備品使用の権利が、新たな分家・転入者に対してどう与えられてきたのかまたないのかもニワバの性格を知る上で重要である。第三に、政治権力からの要請による自治制の成立のなかで、ニワバが自治制の単位そのものであれば矛盾はないが、いささかずれているのはなぜかの問題があげられよう。つまり、自治制の単位イコール・ニワバでない問題のなかで、いずれの原因を考えていかねば、ニワバの本質を十分にとらえきれたとはいいがたいからである。

これらの諸問題に対して、結論は簡単に下すことはできないが、1つの仮設として江戸時代の村は、村人によってニワバと日常的に称されていたが、明治以降の新しい行政区分のなかであらためて旧村の自治制をもちつたえるなかであえてニワバの呼称を前面に出してきたのではなかろうか。そして、旧村の構成員とし、膳椀倉の利用権を明確にし、新しい分家・転入者を一定の資格が成立するまで構成員に加えずにきたのではないかと考えられる。それゆえ、明治になってからの史料にことにニワバの呼称が出てくるのではなかろうか。また、近隣関係とニワバとのずれもおこってきたのではないかと考えられる。

このほか、注目されるのは近隣関係としてのタチイリである。簡単にいえば、もっともつきあいの濃い両隣りといったところであるが、各家において連鎖状に形成されている傾向にある。また、飲料水の確保のために共同井戸が掘られ、その利用にあたって井戸組が結成されているのも注目される。台地の畑作農業における社会関係のいくえにもわたる重層的社会関係をうかがわせてくれるものといえる。

これら以外にも、ヂルイ（ヂシンルイ）とか婚姻にあたってのオヤブニコブンなどの社会関係も伝承されているが、ヂルイについてはほとんど伝承はきえてしまっている。